

南琉球宮古語城辺町新城方言の文法

王, 丹凝

<https://hdl.handle.net/2324/5068151>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 王 丹凝

論 文 名 : 南琉球宮古語城辺町新城方言の文法

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、南琉球宮古語新城方言(以下、新城方言)の文法を総合的に記述したものである。本論文の目的は、新城方言を対象に、400 ページ程度の記述文法書と、800 語程度の簡易辞書(付録 A)、2 編の自然談話集(付録 B)を作成し、ミニ3 点セットとして提示することである。全体の構成は 14 章から成る。以下に、各章ごとの特徴をまとめる。

第 1 章「序章」では、まず本論文の背景・目的・意義について述べる。次いで、筆者自身がこれまで行なった現地(+オンライン)調査概要と論文を執筆するにあたり用いたデータを紹介する。最後に、本論文の構成と表記のルールを提示する。

第 2 章「対象とする方言の概要」では新城方言についての概要をまとめている。言語名、地理と系統、産業・教育、人口・話者数、社会言語学状況、類型論的特徴、先行研究を順に扱っている。

第 3 章「音韻論」においては音韻体系の記述を行う。具体的には、音素体系の提示および各音素の特徴を解説する。特に、宮古語全般に広く観察されている、摩擦を伴う「舌尖母音」の分析について、音声実態、音節構造、名詞形態論、動詞形態論を考慮に入れながら、記述案を徹底的に比較し、記述を行っている。その上で、音節構造や音素配列、音韻規則、アクセント、イントネーションについて述べている。

第 4 章「文法記述の諸単位」は、文法記述に用いている用語について取り上げているものである。まず、形態論的な諸単位である語・接辞・接語、語根・語幹・語幹核・語基についての定義を挙げている。次に、語形成のプロセス、すなわち、接辞付加、複合、重複について、例示しながら説明する。特に、今まで報告されなかった複合語幹の重複を報告し、先行研究では十分に注目されていない、語基とコピーについての議論を行う。そのほか、語類の基準を設け、基本語順について記述する。

第 5 章「名詞形態論」では、名詞の内部構造を提示し、名詞に接続する接辞について記述する。その上で、それぞれの下位分類(普通名詞、代名詞、数量詞)について、細かく記述・分析を行っている。特に、宮古諸方言の先行研究で脚光を浴びることがほとんどなかった再帰代名詞の使い分けについても考察している。

第 6 章「動詞形態論」においては動詞の屈折についての記述を行う。特に語幹拡張辞

の設定に至る経緯と、接辞1つ1つの屈折における出力過程を具体的に提示している。

第7章「助詞類」では助詞類全般(格助詞, 情報構造助詞, 取り立て助詞, 接続助詞, 終助詞)について考察している。

第8章「品詞を跨ぐ機能類」においては, 共通の語幹を持ちながら, 1つの語類に収まらない範疇, すなわち, 指示詞, 疑問詞, PC語類の諸形式について論じる。

第9章「品詞転換」では, 名詞化, 動詞化と形容詞の現象について述べている。

第10章「名詞句の構造」においては, 名詞句の内部構造を示してから, 修飾部と主要部についてそれぞれ記述する。

第11章「述語の構造」では, まず述語をコピュラ動詞述語(名詞述語, 形容詞述語)と一般動詞述語に分けて, 補助動詞構文, 軽動詞構文, 存在構文について考察する。

第12章「単文の構文論」においては格配列, 結合価の操作, 自他対応, 文タイプ, 極性, 態の側面から, 単文の記述を行う。

第13章「複文」は連体節, 補文節, 副詞節, 言い差しを論じるものである。

第14章「機能面からの記述」では, 修飾, 所有, テンス・アスペクト・ムードとモダリティ, 情報構造について取り上げている。

付録Aは語彙集であり, 付録Bは談話資料である。

最後に, 本論文の意義は以下の3点である。まず, 宮古東部方言を対象にする初めての総合的記述文法書であること。これまでの宮古語の記述研究は北西部地域方言が中心を占め, 東部方言である新城方言は先行研究が極めて乏しかった。残された時間がわずかな中で, 新城方言の総合的な記述・記録に寄与することが本論文の意義である。次に, 宮古諸方言の先行研究を踏まえつつ, 摩擦を伴う「舌尖母音」に対する分析への発展, 複合語幹の重複について報告・分析, 再帰代名詞の使い分けについての新しい知見がある点が挙げられている。これらの新たな発見と知見はこれからの宮古諸方言の研究においても役に立つ。最後に, 本論文はコロナウイルスの影響下, やむをえず現地調査を中断し, オンライン調査に切り替えている。オンライン調査をフルに生かして, 文法事実を掘り起こし収集し, ミニ3点セットを完成させたことも, オンライン調査の可能性を示すことができたという点において, 大きな貢献と言えよう。